
ピカチュウ・ザ・ジャイアント

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピカチュウ・ザ・ジャイアント

【Nコード】

N1437M

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

もしも国民的アイドルポケモンであるピカチュウが巨大化したら…？

（前書き）

食前・食中・食後：食事の最中には閲覧にご注意してください、
また、キャラ崩壊が激しいです

・『もてもてふんどし』大安売り！なんと8円！！

「こいつは買いだッ！！」

・タケシは嬉々としてもてもてふんどしを買うためにデパートへと走った…。

・今回のおはなしに『もてもてふんどし』は出ませんし今回のおはなしとは一切関係ありません…間もなく本編が始まります…。

『ビッビガヂュ~~~~~!!』

・唐突にくぐもった、低く図太い声で鳴くのはご存知、我らの国民

的アイドルポケモン・ピカチュウ…。

…なのだが、問題はその『大きさ』だ。

…デカイ、とにかくデカイのだ…全長約一万メートルくらいはある。

…さて、どうしてこうなったかというところ…例の如くサトシ達に挑んできたロケット団達がピッピなどが使う『ちいさくなる』の原理を研究し、その逆の効果を与えるその名も『おおきくなる君スーパーデラックスZ』なる壊滅的なネーミングのスーパーマッスィーンを自分達のポケモンに使って憎つきジャリボーイをやっつけて、ピカチュウGETで幹部昇進イイ感じー！！

…な、ことをやらかそうとしたかったのだが、スーパーマッスィーンの『おおきくなる君ビーム』を誤ってピカチュウに向けて発射…その結果がこれである…。

『ビーーーーガーーーーデユーーーー…。』

「よし、今日からお前の名前はジャイオン…じゃなかった、ピカチ
ユウ・ザ・ジャイアントだ。」

「おい…今、ジャイオンって言おうとしただろ？それに何その名前
！いつの時代のプロレスラーのリングネームだよ！？」

・何故か冷静に淡々と言う根性論主人公・サトシに、ナンパ失敗率
ほぼ100%な男・タケシは思わずツツコんだ。

「ねえ…サトシ、何か指示してみたら？」

・ヒロイン的ポジションのヒカリがサトシに提案し、サトシは「よ
し！」と何か考えついた。

「ピカチユウ！ロケット団に『アイアンテール』ッ！！」

『びゅーぐちゅー！！』

「『バカ野郎ーッ！！』『』『』」

・ピカチユウはサトシの指示を聞いてクルリとその場で一回転、ロ
ケット団の三馬鹿トリオ…最近の『キャンディー・ムサリーナ』と
いうブツ飛んだ偽名のポケモンコーディネーターとして売り出し中
のムサシ、恐らく『ポケモン』の中では一番良い人且つ常識人なコ
ジロウ、何故か喋れてある意味コイツが一番珍しいポケモンと思わ
れるニヤース達…に、向かってイナズマ型の尻尾を振り下ろす技・
アイアンテールを容赦無くブチかました。

「オiiiiiii！？何ふざけた指示出してんだアアアア！！そし

てロケット団ごと山一つ消えたぞッ!!」

「コラ待てイツ!?!勝手にオレ達を殺すな!細目野郎ッ!!」

・タケシは思わずピカチュウのやった『アイアンテール』によって近隣の山を巻き込んでロケット団達をペシャンコにしたことにツッコミを入れた…しかし、血まみれになったコジロウはゾンビの如く復活してさらにタケシにツッコミを入れた。

『ビガッビガチュッ…。』

「え?ピカチュウどうしたんだ?」

・ピカチュウは青い顔して苦しそうな表情をするのでサトシは心配そうにしていた。

『「息苦しくなった」って言ってるニヤ。』

「「「え!?!」」」

「あ、そっか…確か上空は酸素が薄っいからねー、だからじゃない?」

・血まみれになったニヤースの通訳によると、ピカチュウは巨大化してしまった途端呼吸困難になってしまったのだ、血まみれになったムサシはそれは上空の酸素が薄いことによって起きてると言った。

「ピカチュウ!伏せるんだ!」

『「ビガ!!」』

「『こっちに倒れ込むなー!!』」

・サトシの指示により、ピカチュウは酸素を取り込むために地面に倒れ込むが、またまたロケット団は巻き込まれ、黄身の潰れた目玉焼きの如くプチツと音を立てて血を噴き出した。

『ビ〜ガ〜チヨ〜...。』

『「身体が大きいって不便」だって言ってるニャ…ゲフ…ゴフ…!!」』

「ニャ…ニャース…無茶すんな…ブフ…!!」

「普通に『やな感じー!』で飛ばされた方がまだマシよ…ガハ…!!」

・通訳をしながら血まみれで血を吐くニャース、コジロウやムサシも同様の姿で死にかけてる…。

・しかし、次のピカチュウの言葉でロケット団はさらなる『地獄』を見ることになる…。

『ビ…ビガ…ビジュ〜!』

「おい、なんて言ってるんだ? バケネコ野郎。」

『誰がバケネコだニヤツ!? え…えーつと…ゲエエツ!?』

・サトシに何気なくヒドイことを言われたニャースはピカチュウの

言葉に驚愕…次の瞬間、ニヤースから告げられた通訳に全員が戦慄した…。

『…「もらしそう」って言ってるニヤ…。」』

「「「「「ギョエエエエエエー!?」「」「」」」」」

「あ…昨日、オレがタケシの代わりに作ったポケモンフードが当たったな…。」

「原因はお前かいイイイイイイ!」」

・タケシは昨日サトシにポケモンフードを試しに作らせたことを後悔、今後二度とポケモンフード作りを自分以外の人間にやらせることはしないと心の中で決めた、だが…。

・『ケツ論』からして言おう…。

・遅かった…全ては遅かったのだ…。

『ビガ…ビガ…ビギーッ!!』

『ちなみに「大きい方も出そう」って言ってるニヤーツ!!早く逃げるのニヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

「……うぎゃああああああああああああああああああああああああああああ!!」「……」

・ニヤースのさらなる通訳に恐怖する五人はすぐさま脱兎の如く駆け出すも…ピカチュウは我慢の限界を越え、ついに…。

『ビギャー……!!』

「……おげええええええええ!!」「……」

・サトシ達はピカチュウが出した『おもろし濁流』に飲まれ、さらには近隣の町まで巻き込まれた。

・ちなみに町は凄まじい程に…しかもそのピカチュウが出した『濁流』の汚染レベル、ならびに毒素はどくタイプポケモンが垂れ流すよりも何倍もの強力であり、多くの人々やトレーナーのポケモンが犠牲になった…。

「ふざけんなアアアアア!!町が糞尿クンまみれじゃねーか!!」

「返せ！オレ達の綺麗な町を返せ！！」

・町人やトレーナー達が町の汚染や破壊に対してカンカンに怒り、サトシ達を責めまくる。

「畜生！なんで民衆は暴動が好きなんだよ！？悪いのはオレじゃない！ピカチュウとロケット団のザコだけだ！！」

「それ、主人公の言葉！？
反省無しかよ！！」

「確かにオレ達だって悪いさ！だがポケモンの健康管理を怠ったお前も悪いぞコラ！！同じポケモントレーナーとして恥ずかしいぜ！」

・怒った人々を見てのサトシの軽々しい悪口にタケシは『もうコイツにはついていけない』と思い、悪党ながらもポケモンを愛するところが作者的にも『やっぱ良い人』なコジロウも先程からの全ての責任を自分達やピカチュウに全て押しつけるような投げやりな態度のサトシに激怒した。

『ビエー！！ビエー！！』

「な、泣かないでピカチュウ！悪いのはサトシとロケット団だから！！」

『「町の人々にウ。コもらしたところ見られた」って言ってるニヤ…無理もないニヤ…それに今回はかりはミャー達は反省してるニヤ。』

「コジロウ！　こうなりやオミヤー！　アレだニヤー！　焰出してアイツら焼き払えニヤー！」

「それが変身しなさいよ！　『降臨…満を持して！』とか言って！！」

「何その無茶な要求！　焰の錬。術師にジー。！？　確かに中の人同じだけど…無理だからね！？　出来ないからね！！」

・切羽詰まり、コジロウの中の人ネタでどうにかこの状況を打開しようとしたニヤースとムサシ、だが残念…コジロウはこう見えてごくごく普通の人間、国家錬。術師でもなけりやイマ。ンでもないのだ。

「お願いだよ！　ガ。ダムでアイツら狙い撃って！！」

「お前もかい！？　ロツ。オンでもねーよ！！」

・サトシまでコジロウの足元にしがみついて某緑のスナイパー的なガ。ダムを出せとか無茶苦茶言ったが残念…そっちもないし、仮にあつたら『ポケモン』が別な話になってしまう…。

・まごまごしてる内にトレーナー達は自分のポケモン達に技の指示を始めていた。

「『シャドーボール』！」

「『たねマシンガン』！！」

「『はかいこうせん』！！」

「『メタルクロー』!!」

「『リーフブレード』!」

「『失恋大爆笑パンチ』!」

「『『オイイイイ!』?最後の一つだけ違うぞオオオオオ!
!なんでで。じゃ。すじーさ。!?!』」

- 次々放たれる強力で巧みな技の数々…一部違うベクトルのものがあつたが気にしてはならない、ちなみにでん。やら。じー。んは作者が未だに好きなコロ。口漫画の一つである…。

- だが迫り来るポケモン達の技は今の全長約一万メートルのピカチュウには対してダメージを与えられなかった…貴様らの技など蚊ほども効かぬわッ!!

「あれ?サトシは…って、あんなところに!!」

- タケシはサトシがいないことに気づく、そして周りを見渡すと自分達の遙か後ろの彼方にメガホンを持ったサトシがいた。

「おいピカチュウ!その民衆に『ボルテッカー』だ!!オレは逃げるから足止めはよろしく!!」

「『『全ての全てが最低だアアアアアアアアアアアアアアア
!?!?』」

- サトシはピカチュウにそれだけ指示するとまるで力。トのクロッ。アッ。ばりの超っ速スピードでトンズラこいてどこかへと消えて

しまった…。

『ビガビガビガビガー……！！』

「グギヤアアアアアアア！！」

「ぐぼうああああああ！！」

・全身に電撃を纏い、高速で相手に突撃するピカチュウ最強の技『ボルテッカー』によってサトシ以外の奴らは全員死亡…さらには勢いが止まらず、シンオウだけでなく、他の大陸にまで突撃してしまい、踏み潰されたり電撃によって消滅…。

・こうして世界の半分が滅びた。

・その後、サトシやピカチュウはというと…。

・最初こそは巨大化したピカチュウに苦情は殺到したものの、人為的とはいえ全長一万メートルのピカチュウはマスコミの注目を集

めた。

・イベントやドラマや映画と引つ張りダコなピカチュウのトレーナー兼マネージャー・サトシはガッポガッポ大儲け、過労死寸前までピカチュウをコキ使いまくった…尚、一日の休憩時間ならびに睡眠時間はたった10分である、明らかなポケモン虐待である。

・ちなみに金の一部はあの時死んだタケシ・ヒカリ・ロケット団達の墓を御丁寧につったり、マサラタウンの母親に豪邸作ってやつたり、オーキド博士の研究費を提供したり…今では昔の女であるカスミやハルカや歴代女性ジムトレーナー（全員ド派手なドレス姿や軽く18禁突入な格好）を侍らせ、毎日毎日贅沢三昧であった。

「巨大ピカチュウのトレーナーのサトシさん！何か一言！」

・マスコミの記者会見で、悪趣味な紫のスーツにサングラス、何千万もの値打ちがある宝石のアクセサリー、サングラスをかけながら葉巻を吸うサトシはこう言った。

「トレーナーやってた頃よりもお金儲かりまつせ、これからのポケモンはバトルやない、金や！」

・そう言った直後…

『ピ…ガ…チャ…』

・ピカチュウはついに本当に過労死してしまい、倒れてしまった…

「ちょ…ピカチュウ？いやなんで今死ぬんじゃ！？この電気鼠が！」

・さらには電話（純金製）が鳴り…。

「もしもし…はい、『おはテレ』さん…え！？スポンサー降りるつて！あ、今度は『シンオウ銀行』さん…え！？もうお宅に御融資は出来ない…あ、ハニー達…ええ！？『金のない男にはもう用はない』…そんなアアアアアアアアア！？」

・…どうやら今までピカチュウの身体を酷使させたツケがきたらしい、マスコミは唾を吐き捨てながらサツサと帰ってしまった。

・ピカチュウが死んでサトシは大富豪から一気に大貧民へと超絶ラックダウンした…。

・そして格好と私生活は一変、パンツ一丁に持ち物はゴザと茶碗だけ、公園で『お恵みを』とか言っつて物乞いしながらその生涯を終わらせた…。

・これはトレーナーとポケモンの友情の物語ではない…欲と金に走った愚かな一人の男の物語である…。

・おしまい♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1437m/>

ピカチュウ・ザ・ジャイアント

2011年1月4日03時33分発行